

はじめに

病院長 小川 潔

新病院へ移転してから1年3カ月が経過して、新しい場所における小児医療のニーズを把握でき、埼玉県立小児医療センターの立ち位置が明確になった中で2018年度を迎えました。新病院ではさいたま赤十字病院と連携した周産期体制と小児救急医療体制の強化が大きな柱となりましたが、実際に年間50件以上あったコーディネーターを介した東京都への母胎搬送が5件程度まで減少し、外傷を中心とした救急患者が著しく増加しました。特に、数多くの胎児診断された先天異常の症例がさいたま赤十字病院へ紹介され、新生児の外科症例が増加し、診療内容は大きく様変わりしました。

まず2018年度の診療実績につきましてご報告申し上げます。2018年度の入院延べ患者数は89,562人で、前年度より3,998人(4.3%)減、病床利用率は77.7%で、前年度より3.4%減、平均在院日数は12.1日で、前年度より0.5日短縮でした。手術件数は3,341件で、前年度より26件(0.8%)増加し、増加傾向が続いています。一人当たりの稼働額単価は94,663円で、前年度より577円(0.6%)増となっていました。手術件数以外の入院診療実績が低下した理由はNICUおよびGCUにおけるMRSAのアウトブレイクによる入院制限です。2017年10月頃からNICUおよびGCUにおいてMRSA感染患者が増えだし、2017年12月1日に防疫対策本部を立ち上げて対策を講じてきました。残念ながらMRSA感染の波及を止めることができず、2018年11月末からNICUおよびGCUへの入院を約2カ月間制限せざるを得なくなりました。埼玉県内の多くの医療機関に大変なご迷惑をおかけいたしました。MRSAの感染拡大は病院の古さとは関係がないことを痛感させられました。この経験を今後の感染対策に生かしていこうと考えています。外来診療においては、新患者数が12,128人と、前年度に比べて108人(0.9%)増加し、外来延べ患者数は139,086人で、前年度に比べて1,034人(0.7%)増加しました。

新病院への移転を契機にPICU設置など診療体制を大きく変えましたが、移転から2年目に入り安定しましたので、外部からの目で診療内容の見直しをしていただくために2019年2月に病院機能評価を受審いたしました。病院機能評価が求める基準に合致するように1年かけて様々な業務の見直しを行いました。自分たちでは気づかなかった問題点が明らかになりました。幸い、外部委員の方々からは高い評価を受けることができ、「改善要望事項なし」という結果でしたが、今後も引き続き診療内容の向上をはかっていきたいと考えています。

地域との連携ということでは、2019年1月1日付けで災害拠点病院の指定を受けました。隣接しているさいたま赤十字病院が災害拠点病院であり、さいたまスーパーアリーナが避難所になることから当センターにも災害拠点病院となってさいたま赤十字病院と連携することが求められてきました。また、東日本大災害や熊本地震の時には新生児医療をどのように維持するかが課題となりました。2018年12月末の時点で埼玉県には災害拠点病院が

18施設ありましたが、1施設当たりの人口は40万3千人と全国平均17万4千人に比べて埼玉県においては災害拠点病院は不足しております。小児医療の中核施設である当センターが災害拠点病院として体制を整えたことは大きな意義があり、他の災害拠点病院からも期待されている所です。今後は、さいたま赤十字病院やさいたま与野医師会とも連携しながら、よりしっかりとした体制を整えていきたいと考えております。

2018年度の大きな出来事としては11月に第65回日本小児総合医療施設協議会(JACHRI)総会を担当したことがあげられます。全国36施設が加盟していて、年に1回総会が持ち回りで開催されます。施設部門長連絡会だけでなく、事務部門長、看護部門長、薬剤部門長、臨床検査部門長それぞれの連絡会や診療情報分析連絡会、ソーシャルワーカー連絡会があり、総勢260名を越える参加者となりました。第56回に次いで5回目の担当となりましたが、成功裏に終えることができました。

今後に向けた取り組みとしては、がんゲノム医療連携病院としての体制を強化するために、臨床検査室の国際規格であるISO15189の認定を受けるべく9月から準備を開始しました。また、さいたま赤十字病院と連携して肝臓移植に取り組む予定で準備も進めています。

小児医療センターにとって新病院への移転は大きな変化でしたが、2018年度は当センターにとって大きな転換の始まりとも言うべき年となりました。県立4病院の経営状況の悪化や少子高齢化などの医療環境の変化に対応していくために、埼玉県立病院の在り方についての外部委員を中心とした検討会が6月から始まりました。平行して、各病院でも5月から11月にかけて4回職員勉強会が開催されました。埼玉県立病院の在り方検討委員会からは独立行政法人化の方向性が示され、今後準備が進められていく予定です。

以上、埼玉県立小児医療センター年報(2018年版)をお届けするにあたり、当センターの概要をご報告申し上げます。職員一同一丸となって、安心・安全な医療、高度医療、地域と連携した医療を目指して参ります。そのためには、近隣の医療機関、行政機関、地域住民の皆様など数多くの関係各位のご指導が不可欠です。これからもご指導、ご支援をよろしくお願い申し上げます。

小児医療センター歴代幹部職員

	センター長		病院長	副病院長	事務局長	看護部長
1983	荻野淑郎		森 彪	河野三郎	小笠原昭雄	加藤ミチ子
1984	荻野淑郎		森 彪	河野三郎	浜野信雄	加藤ミチ子
1985	荻野淑郎		森 彪	河野三郎	松井雅雄	加藤ミチ子
	総 長		病院長	副病院長	事務局長	看護部長
1986	荻野淑郎		森 彪	河野三郎	松井雅雄	加藤ミチ子
1987	荻野淑郎		森 彪	河野三郎	並木武夫	加藤ミチ子
1988	荻野淑郎		森 彪	河野三郎	並木武夫	加藤ミチ子
1989	荻野淑郎		森 彪	河野三郎	古橋司郎	加藤ミチ子
1990	森 彪		河野三郎	山本圭子、赤司俊二	熊倉 勲	加藤ミチ子
1991	森 彪		河野三郎	山本圭子、赤司俊二	大沢 彰	古橋美智子
1992	森 彪		河野三郎	山本圭子、赤司俊二	関根隆俊	古橋美智子
1993	森 彪		河野三郎	山本圭子、赤司俊二	関根隆俊	古橋美智子
	総 長	副総長	病院長	副病院長	事務局長	看護部長
1994	河野三郎	山本圭子	赤司俊二		関根隆俊	古橋美智子
1995	河野三郎	山本圭子	赤司俊二	城 宏輔	井上岩三	牧 満子
1996	河野三郎	山本圭子	赤司俊二	城 宏輔、佐藤雅人	井上岩三	牧 満子
1997	植田哲夫	山本圭子	赤司俊二	城 宏輔、佐藤雅人、今泉了彦	井上岩三	牧 満子
1998	植田哲夫	山本圭子	赤司俊二	城 宏輔、佐藤雅人、今泉了彦	石田三郎	牧 満子
1999	植田哲夫	山本圭子	赤司俊二	城 宏輔、佐藤雅人、今泉了彦	石田三郎	近藤よし子
2000	植田哲夫	山本圭子	赤司俊二	城 宏輔、佐藤雅人、今泉了彦	深谷榮作	近藤よし子
	センター長	参 事	診療局長	診療局副局長	事務局長	看護部長
2001	植田哲夫	山本圭子	赤司俊二	城 宏輔、佐藤雅人、今泉了彦	深谷榮作	上原敦子
		参 事	病院長	副病院長	事務局長	看護部長
2002		山本圭子	赤司俊二	城 宏輔、佐藤雅人、今泉了彦	北村富士雄	上原敦子
2003		山本圭子	赤司俊二	城 宏輔、佐藤雅人	北村富士雄	野中甲子
2004			赤司俊二	城 宏輔、佐藤雅人、野中甲子	渡辺春男	野中甲子(兼)
2005			城 宏輔	佐藤雅人、大野 勉、花田良二、野中甲子	渡辺春男	野中甲子(兼)
2006			城 宏輔	大野 勉、花田良二、中村 讓、野中甲子	陣内 博	野中甲子(兼)
2007			城 宏輔	花田良二、中村 讓、西本 博	陣内 博	柏浦恵子
2008			城 宏輔	花田良二、中村 讓、西本 博	堀越久夫	柏浦恵子
2009			城 宏輔	花田良二、中村 讓、西本 博	堀越久夫	小木曾國子
2010			中村 讓	花田良二、西本 博、大石 勉	堀越久夫	小木曾國子
2011			中村 讓	花田良二、西本 博、大石 勉	北村芳之	小木曾國子
2012			中村 讓	花田良二、西本 博、大石 勉、西ヶ谷正子	北村芳之	西ヶ谷正子(兼)
2013			中村 讓	花田良二、西本 博、大石 勉、西ヶ谷正子	笠原 実	西ヶ谷正子(兼)
2014			中村 讓	花田良二、小川 潔	笠原 実	黒田京子
2015			岩中 督	花田良二、小川 潔	森 美秀	黒田京子
2016			岩中 督	花田良二、小川 潔、望月 弘	森 美秀	黒田京子
2017			小川 潔	望月 弘、渡邊彰二	阿部 隆	久保良子
2018			小川 潔	望月 弘、渡邊彰二、小熊栄二	阿部 隆	久保良子